

# 部落の青年にとっての部落解放運動

運動への参加・継続要因

内田龍史

**要約** 「全国部落青年の雇用・生活実態調査」のヒアリング調査データから、部落解放運動に参加している青年の、運動への参加・継続要因について検討を行った。結果、青年の多くは、部落解放子ども会活動・親、あるいは差別を受けることなどによって部落出身であると自覚し、差別をなくしたいという想いや、地元や地元を越えた仲間意識を基盤とし、そこから得られる新たな学びや出会いの経験を経て、運動を継続していることを明らかにした。

## はじめに

本稿は、被差別部落青年の雇用と生活実態を把握することを目的として、部落解放同盟中央本部が（社）部落解放・人権研究所の協力を得て2010～2011年度に実施した「全国部落青年の雇用・生活実態調査」<sup>1)</sup>のうち、これまでの生活史を聞き取ったヒアリング調査結果の分析の一部である。

質問紙調査ならびにヒアリング調査において中心的に明らかにすべき課題は、調査対象者の生育歴と現在の職業の内実であったが、生活史を聞き取るなかで、部落認識・部落問題経験や部落解放運動への参加経緯、運動への想いなども把握することができた。そこで本稿では、部落解放運動を継続していくことが制度的に困難な状況を迎えている現状において、青年たちが部落解放運動に参加し、継続している要因について分析を行うこととしたい。なぜなら、青年たちの語りから、現在の運動のあり方に対する示唆や、必ずしもその内実を理解されているとは言いがたい、当事者以外の人々からの部落解放運動への理解を促すことが可能になると考えるからである。

なお、本稿で示す「語り」の多くは、ベルトーの言う、共通の特徴を示すモデルの「飽和」(Bertaux, 1997=2003)を経たものと考えているが、引用は紙幅の都合上、典型的・代表的なものを挙げるにとどめざるを得ない。同様の経験を含む多数の「語り」の詳細については2013年内に発刊される予定である、『部落解放同盟中央本部青年雇用調査報告書（仮）』を参照いただきたい。

## 1 調査ならびに調査対象者の概要

### 1 調査の概要と調査対象者の特性

本調査は、部落青年の雇用と生活実態を把握することを目的としているため、その対象は部落ならびに部落から他出した若者である。調査対象者の選定は各府県連にお願いし、質問紙調査を実施した。選定条件は、おおむね15～39歳で、「世帯収入300万円未満」、正規・非正規問わず働いている人ないしは最近失業した人とした。そのうえで、彼／彼女らの生活のこれまでの状況を具体的に把握するために、調査票の最後の欄にヒアリング調査に協力いただける人に

連絡先を記入していただき、調査協力者が多かった近畿・四国・九州ブロックにおいて、ヒアリング可能な対象者に後日調査を実施した。調査期間は2011年1月～2012年2月にかけてである。

こうした手続きで行われた調査であるため、実質的には部落解放同盟各府県連の青年部を通じて調査を実施することとなった。そのため、本調査結果から得られたデータは部落青年の全体像ではなく、部落解放同盟の運動に近い層の現状把握と考えるのが妥当であり、ヒアリング調査も、基本的には各府県連の青年部の仲介を受けて実施されたものである。逆に言えば、近年、若者が地域で部落解放運動を続けていくことが困難な状況を迎えているなかで、どのような要因が青年を運動に惹きつけているのかを明らかにすることができる格好の対象者でもあると言えよう。

ここで、部落解放同盟における青年部活動について、若干解説しておきたい。部落解放同盟は全国各地の部落に支部を、支部の連合体として都府県連合会を、中央組織として中央本部を組織している。青年部あるいは青年対策部は、支部・府県連・中央それぞれのレベルにおいて組織されている<sup>(2)</sup>。1957年からは年に一度、部落解放全国青年集会（通称、全青）が開催され（吉村 2001）、部落解放運動の実践等交流の場として2013年度には第57回目の集会が開催されるはこびとなっている<sup>(3)</sup>。

質問紙調査においても、「解放同盟は身近な存在である」という設問に対して、「あてはまる」が47.5%、「ややあてはまる」が27.7%となっており、あわせて75.2%が「あてはまる」と回答している（図1）。このことから、そもそも部落解放同盟の運動に参加している、あるいは参加していた経験があるなど、身近な存在であった層が本調査の対象となっていることがわ

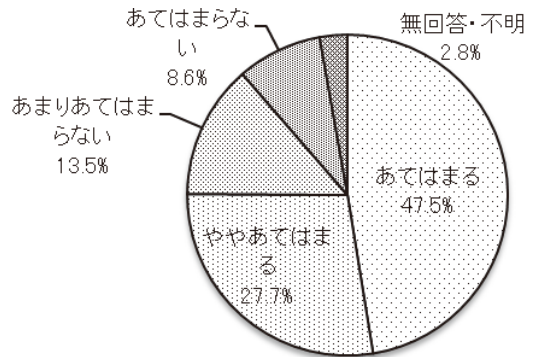


図1 部落解放同盟は身近な存在である (N=817)

かる。

## 2 調査対象者の概要

ヒアリング調査は、43名に実施することができた。表1は調査対象者の概要である。

43名の対象者のうち、居住ブロックは近畿ブロックが19名、四国ブロックが14名、九州ブロックが10名である。年代は、30代が23名、20代が18名、10代と40代が1名ずつである。

性別は男性が34名、女性が9名と男性に偏っている。質問紙調査においても性別の割合は男性が58.9%、女性が33.9%であり、男性の割合が高くなっていた。この背景には、女性は結婚すると部落外に転出したり、地区内においても青年部ではなく別組織である女性部に所属するケースが多いことなどが考えられる。

部落出身の別については、部落出身が38名とほとんどが出身であり、部落外出身であるのは3名、「わからない」とするものが2名である。

学歴は、中卒5名、高校中退4名、高卒14名、大卒12名などとなっている。質問紙調査からは高等教育が19.3%と2割に満たなかったことから、ヒアリング対象者はその中では比較的高学歴な者が多いと言えよう。

現職は、正社員（+公務員）が15名と最も多いが、アルバイト・パート・契約・嘱託・非常勤など多様な働き方が見られ、無職も4名いる。

表1 調査対象者の概要

ID	居住ブロック	年齢	性別	出身	学歴	職業
①	四国ブロック	20代	男性	部落出身	中卒	無職
②	四国ブロック	20代	男性	部落出身	高卒	正社員
③	四国ブロック	30代	男性	部落出身	中卒	自営業
④	四国ブロック	30代	男性	部落出身	高卒	正社員
⑤	四国ブロック	20代	男性	部落出身	高卒	正社員
⑥	四国ブロック	30代	男性	部落出身	中卒	自営業
⑦	四国ブロック	30代	女性	部落外	高卒	パート
⑧	四国ブロック	20代	男性	部落出身	高校中退	正社員
⑨	四国ブロック	30代	男性	部落出身	高校中退	非常勤職員
⑩	四国ブロック	20代	男性	部落出身	中卒	アルバイト
⑪	四国ブロック	10代	男性	部落出身	中卒	自営業手伝い
⑫	四国ブロック	20代	男性	部落外	大卒	自営業
⑬	四国ブロック	30代	男性	部落出身	大学中退	無職
⑭	四国ブロック	20代	女性	部落出身	短大中退	無職
⑮	近畿ブロック	20代	男性	部落出身	大卒	アルバイト
⑯	近畿ブロック	20代	男性	部落出身	大卒	アルバイト
⑰	近畿ブロック	30代	男性	部落出身	通信制大学在学中	無職
⑱	近畿ブロック	20代	女性	部落出身	大卒	専門学校在学
⑲	九州ブロック	30代	男性	部落出身	高卒	正社員
⑳	九州ブロック	30代	女性	部落出身	高卒	パート
㉑	九州ブロック	30代	男性	部落出身	高卒	正社員
㉒	九州ブロック	30代	男性	部落出身	大卒	公務員
㉓	九州ブロック	30代	男性	部落出身	定時制高校卒	正社員
㉔	九州ブロック	30代	男性	部落出身	高等養護学校卒	アルバイト
㉕	九州ブロック	40代	女性	部落外	専門学校卒	嘱託職員
㉖	九州ブロック	30代	男性	部落出身	大卒	常勤講師
㉗	九州ブロック	30代	男性	部落出身	大卒	正社員
㉘	九州ブロック	30代	男性	わからない	高卒	契約職員
㉙	近畿ブロック	20代	男性	部落出身	大卒	契約職員
㉚	近畿ブロック	20代	男性	わからない	高卒	契約職員
㉛	近畿ブロック	20代	男性	部落出身	高校中退	正社員
㉜	近畿ブロック	20代	男性	部落出身	大卒	契約職員
㉝	近畿ブロック	30代	男性	部落出身	高校中退	契約職員
㉞	近畿ブロック	20代	男性	部落出身	大卒	正社員
㉟	近畿ブロック	30代	女性	部落出身	大卒	正社員
㊱	近畿ブロック	30代	男性	部落出身	大卒	正社員
㊲	近畿ブロック	20代	男性	部落出身	高卒	正社員
㊳	近畿ブロック	30代	女性	部落出身	高卒	パート
㊴	近畿ブロック	30代	男性	部落出身	専門学校卒	正社員
㊵	近畿ブロック	20代	男性	部落出身	専門学校中退	非常勤職員
㊶	近畿ブロック	30代	男性	部落出身	高卒	公務員
㊷	近畿ブロック	20代	女性	部落出身	高卒	非常勤職員
㊸	近畿ブロック	30代	女性	部落出身	高卒	非常勤職員

## 2

## 部落民としてのアイデンティティ形成と部落認識

本節では、部落民としてのアイデンティティ形成、すなわち、どのようにして部落問題を認識し、自身が部落出身であると自覚するに至ったのかについて検討しておきたい。なぜなら、部落出身であるというアイデンティティは、当事者運動であった部落解放運動に参加し、さまざまな実践を行ううえで、その核になり得るからである<sup>(4)</sup>。なお、部落のアイデンティティ形成に関する質的調査に基づく先行研究には、1990年代以降一定の蓄積がある<sup>(5)</sup>が、必ずしも青年を対象にしたものではなく、かつ少数の事例を扱っているものが多い。40数名を対象とする本調査は、部落解放運動に参加している青年層という限界はあるものの、部落のアイデンティティに関する量的調査に基づく先行研究<sup>(6)</sup>の知見とをつなぐ可能性があると言えよう。

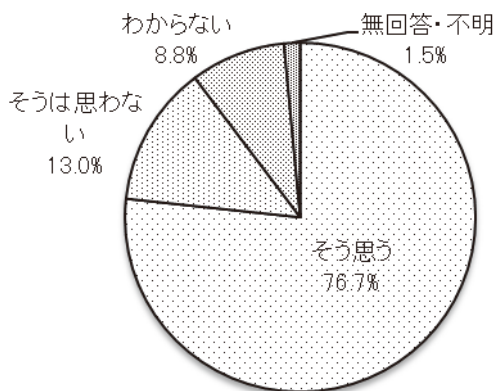


図2 自分を部落出身者だと思うかどうか(N=817)

質問紙調査の結果(図2)を見ると、自分自身を部落出身者だと思うかどうかを訪ねた質問については、「そう思う」が76.7%、「そうは思わない」が13.0%、「わからない」が8.8%となっており、4分の3以上が部落出身であるという自覚を持っている。

### 1 部落解放子ども会活動を経験する

部落出身者は生まれながらにして部落出身で

あるという認識を持って生まれるわけではなく、生育過程での何らかのきっかけで部落出身であることを知ることになる。そこで大きな役割を果たしてきたのが部落解放運動であり、運動は部落の子どもたちが部落出身であることを自覚することを求めてきた。それは、差別によってその立場を知るのではなく、あらかじめ差別される可能性がある立場であることを知ったうえで、その差別に負けないような子どもたちを育てるためである。その場となっていたのが「部落解放子ども会」活動であった。

1970年代以降に進展した部落解放教育運動は、「社会的立場の自覚」をスローガンとしていた。部落解放同盟が組織する部落解放子ども会活動は、差別と闘う集団としての主体であり、これを通じて子どもたちは解放の運動と結合し、そのことによって「自己のおかれた社会的立場の自覚」を確立していくとされた(総論部会② 1975)。

部落解放子ども会活動は、同和対策事業の伸展のもと、社会教育活動を発展させるために設置された教育集会所や青少年会館(地域改善対策集会所)によって活動の拠点が与えられ、学校での同和教育とともに差別と闘う「部落民」としての育成過程となっていた。こうした活動は、差別に負けず、差別と闘う「部落民」アイデンティティの形成をはかる、アイデンティティ・ポリティクス場となっていたのである(内田 2010)。

部落の子どもたちはこうした子ども会活動への参加から出発し、中学生組織である「中学生友の会」、高校生組織である「高校生友の会」、大学生組織である「大学生友の会」などでの活動を経て、差別と闘い続ける活動に携わることが期待されてきた。

かくして、本調査においても、地域によって名称は若干異なるものの、ほとんどの対象者が

いわゆる部落解放子ども会に参加しており、学校と連携しつつそこで部落問題を認識し、自身が部落出身であることを自覚するに至ったケースが見られる。典型的には以下のような語りである。

【ここはいわゆる同和地区だとか、被差別部落だとか、そういうことはどのタイミングで分かったんですか？】気付いた時は、ってことですよ。保育所行くでしょ、で、保育所、乳幼行って、幼児保育所から小学校上がるまでに、子ども会行くんですよ。そこの青少年会館に、ならしみたいな感じで、交流で行くってというのがまだあったんですよ。【保育所から？】そうです。いよいよ小学校に上がるね、というときの、春休み期間みたいな時に、よく行くんですよ。ほんで、子ども会があるから子ども会へ行って、小学校に入っても、放課後はもう、集団下校で子ども会なんで。【それがある意味で当たり前になって、生活の中で当たり前】そうですね。で、上も下もそれが当たり前やと思ってるし、ずーっとそういうもんやと思ってたんで。だからその、子ども会に行かないっていう選択肢が他の子にあったっていうことに、気付いたのがいつなんかなあーっていうのが、ちょっと気になりますけどね（笑）だから、そうですね、その、子ども会っていうのはやっぱり大きかったですよね（中略）あのころは完全に、部落やなんやていうのは分かってましたね、中学校になったら分かってましたね。（⑳・近畿・30代・男性・正社員）

## 2 親から聞く

次に、親から直接的に聞くケースがある。

【部落についていつ頃、どういう形で知りましたか。】小学校の時に、僕なんか…なんかで興味持ったんです、土農工商・穢多非人みたいな。【何年生ぐらいですか。】3、4年生、4年生ぐらいやったですかね。それで家で親に聞いたら、このへんもそうなんやゆうて、うちもそうやゆうて。ほんで、やっぱ子ども会というの、そこからいろいろ自分で考えたり、親に聞いたりする中で、自然とこうわかっていった。人からポンっと言われるんじゃない。（中略）【その後、今まで親からは（部落のことについては）あんまりっていうことですか。】そうですね。別に否定もせえへんし隠しもせえへんしっていう感じやから。（㉑・近畿・30代・男性・公務員）

## 3 差別によって自覚する

先述したとおり、差別によって部落出身であることを自覚することがないよう、部落解放運動はあらかじめ反差別のメッセージを伴って社会的立場を自覚することを求めてきた。しかし、差別を受けてはじめて部落出身であることを自覚するケースや、おぼろげに部落問題を理解していたものが、差別を受けることによってはっきりと自覚するに至るケースなども見られる。

⑤は就職の面接の際に、⑳は友だちの親から差別を受けた事例である。

【この地域がまあ被差別部落だ、同和地区だっていうことで見られるし、そのことについて気付いたっていうか、知ったっていうかそういうきっかけとかなんかありました？】ずっと学習会とかしとって。【解放学習？】そうそう。そんなんとかの経緯はもうあれやったんですけど、改めて思ったっていうたら自分が就職するときです



ね。【それはどういうときですか？】僕が一回目の仕事辞めてから、仕事探しよったときに、ガソリンスタンドに面接したんですよ。そのときに、●●（地名）ですって言うたときに、そこにおっきなスーパーがあるんですけど、そっちから南か北か聞かれたんですよ、詳しく。住所書いといたんですよ●●（地名）町南って。「住んでるところはどこですか？」ってまあまあおかしい質問じゃないですか。「どっちですか」って言われて、「えっ、何ですか？」って聞いて、それ住所書いてる通りなんですけどって言ったなら「いやいや、北か南かだけ教えてほしいんや」って言われて。「それ言う必要あるんですか？」って言うたら、「別に言いたくなかったら言わなくてもええけど」って言って。（中略）「南の●●（地名）の●●（部落名）」って言うたら、「あっ」って言われて。【それで判断するんですか？】北か南かって言われて。【南って答えたら？】もう落とされましたね、南ってだけで。南の時点でもう落とされてます。【へえー。結局その面接だめやったん？】で、職安に行って、こういう事聞かれたけどって、報告があるって。そしたら「そんなはずはないんやけど」って。職安の人言いに行ったら、「そんなつもりで聞いたんじゃない」って。結局落としてしもとんねん。（⑤・四国・男性・20代・正社員）

【●●（地名）が部落であるとか、同和地区であるとかをちゃんと認識したのはいつぐらいですか？】高学年くらいですかね。あれ高学年やったと思う確か。今でも一番仲良くて、ムラの子じゃないんですけど、地区外の子で一番の大親友の子がそいつが5年のときに引っ越してきたんですよ。そ

れで同じクラスになって。最初ってやっぱ転校生の子が来たら、どんなやつかなってちょっかい出しますやん？そしたら知らぬ間に仲良くなって。で、そいつも青館とか来いよって遊びにきたりしてるときに、そいつが、自分のおかんにもうあそこ行ったらあかんって言われたんですよ。あそこ出入りしたらあかんって。もう遊ぶなみたいな。俺とね。【っていうのをその友だちから聞いたんですか？】でもそいつがその時に、うるさいっておかんに言い返してくれたんですよ。そんなこと言うんなら、もう家帰らんって言うてくれたんですよ。なんで行ったらあかんねんって俺言い返したよって言うてくれて。（③⑦・近畿・20代・男性・正社員）

#### 4 場所でわかる

他にも、部落だと気付くきっかけが、同和対策事業によって建てられた改良住宅等の形態や、場所でわかるという語りもあるが、紙幅の都合上割愛する。

### 3 部落解放運動に参加・継続している要因

本節では、部落解放運動に参加・継続している要因について検討を行う。結論を先取りして言えば、①部落差別への対応、②地元の仲間への愛着、③地域を越えたつながり、④多様な学びと出会い、⑤その他に分類することができる。以下、それぞれの典型的な語りを紹介しよう。

#### 1 部落差別への対応

部落解放運動の目的は、部落差別を撤廃することにある。当然のことであるが、部落解放運動に参加・継続する要因として、部落差別をなくしたいという想いがある。そしてその背景に、

自らの部落差別体験があることも少なくない。

⑨は、青年部活動をはじめたきっかけとなった父親と自分の就職差別の実情を以下のように語る。

1番大きかったのがこの父のことなんです。あの、父が、まあ言うたらその、就職問題になってくるんですけども、その、父方の姓の名字っていったら、もう部落出身やいうのがわかる名字であって、あの、全く仕事が出来なかった時代があったらしいんですよ。で、その当時やから僕や次男坊を食べさせないかんから言うて、名字を変えたっていう、母方の姓に変えた、そうでもせんかったら仕事が出来なかったっていうん聞いてから変わりましたね。やっぱりそれは、これはいかんぞいうて。(中略)【ホントに仕事に就けないっていう風な状況だったんですかね?】らしいですね、それは後に僕もわかったことなんですけど。【何か実感されることがあったんですか?】あの一、その、●●(県名)の派遣の仕事してからこっちに帰ってきたっていうときに、もう実家じゃなくで●●(地名)に住所移したんですよ、この●●(部落名)支部の方に、そのときに僕、面接受けて13回全部落ちましたからね、それで、その中でも言うたらあの、「ああ、●●(部落名)か」っていう言葉が出てきたりもあったんですよ。【面接の場面で?】面接の場面で、それどういうことですかとは言ったんですけどね、(相手は)いやいや、そういうのじゃないんやって言うて、とは言ったんですけど。ほんで、今まで僕全部一発で行きよったんが、その、●●(部落外の地名)の住所から、●●(部落名)の住所に変わって全部全滅やったんですよ。まあ、こじつけ

るっていう言い方したら僕もあれかなって思うんですけど、やっぱり勘違いじゃなくて、そういうんじゃないくて、あの、勘ぐりますよね、やっぱりあるんかって。【その、受けるところが違ってるわけじゃないんでしょう?同じようなところを受けてってことなんですか?】いろんな業種ですね、自分が出来そうな仕事っていうのは、全部ですね。【はねられるはずがないところで、こう、はねられ続けたっていうことなんですよ】そうですね。(⑨・四国・30代・男性・非常勤職員)

質問紙調査では被差別体験についてたずねてはいないが、「部落差別を受けるかも知れないと不安を感じることもある」という設問に対しては、「あてはまる」が21.8%、「ややあてはまる」が27.3%であり、あわせて49.1%が「あてはまる」と回答しており、半数程度が不安を感じている結果となっている。

こうした不安もあってもか、子どもや子ども世代に差別を受けて欲しくないという想いがある。特に子どもがいる場合には子どもが差別を受けることが心配であり、だからこそ早く部落出身であるという立場を伝え、差別に負けないようになって欲しいと考えているケースがある。

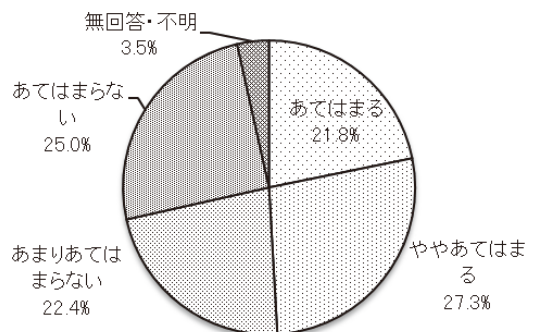


図3 部落差別を受けるかも知れないと不安を感じることもある (N=817)

20代後半から、地元で全国青年集会（全青）が開催されたことをきっかけに地元で運動を始めた⑥は、以下のように語る。

なんでもっとはよ運動せえへんかったんやろいうんと、何でそのムラの先人らはもっとはよ青年部なり、その運動を周知してくれんかったんやろいうのはまずありますね。（中略）（別の機会の全青）で、自分発表させてもらったんですけど、はい。その時にやっぱり同じ境遇の人とか、そんでやっぱりおんなじとこでおんなじ環境でおっても、そのちゃんと差別された時にはみんな言い返す口もとうし。そういうの勉強するでしょ。そういうの見たら自分はずかしなってきた。で、最低限もう言われたら言い返せるいう口をもっときたいというんがもう、あれですか。【ようはあれですか、差別に負けへんっていうかね。】はい。【子どもにはやっぱり、そういう部落民やでっていうのは…】言ってます。【で、やっぱりそれは、差別があったときの負けへんようにみたいな。】そうですね。と、あと自分がそういう状況…わからへんでしょ？言うてなかったら、差別やでっていうふうに。ここで自分が住んどるところがどういう状況なんかいのと。で、そのよその校区の子とその家の建ちかた、自分が思った通りのことをやっぱり自分の子どもには伝えてますね。一番上の子には。（⑥・四国・30代・男性・自営業）

こうした想いは、部落出身の男性と結婚し、子どもを持つ部落外女性にとっても共通するものである。

【運動を続けてらっしゃるっていうのは、

やっぱり運動大切やなっていう気持ちですごく強いんですかね？】子どものためですよ、子どもが差別されたときに何も言えんって悔しいじゃないですか。【そういう気持ち、子どものために運動しないとけないという気持ち強い？それがやっぱり第一？】それもあるし、全青とかいろんなどこ知り合いが出来るじゃないですか？それもすごく大きくて、うん。【あー、なるほどね、そうですね、全青って刺激を受けますよね】うん、全女<sup>(7)</sup>行きよったんで最初の女性部として。【あ、そうかそうか】全女行きよって、その、入門？入門で何かすごい刺激を受けて（中略）全女は何かみんな泣きながら…子どものこと？とかはすごい衝撃的やって。（⑦・四国・30代・女性・パート）

そして、差別に悩む子どもや青年たちには受け皿が必要であり、青年部活動を担う年齢に近い自分たちがそうなるべきだという語りがある。

やっぱりですね、地区じゃないですか。その、実際今は…今ってのはネット社会じゃけ、表立ってはそんなに知られてないってなるんやけど…まあ誹謗中傷の言葉は書かれますよね。あったときに、活動せないかんっていうので。そのときはやっぱりそれなりに勉強してきた人間が、それなりに言ってやらんと…助け舟がないと…ねえ。どうしようもないけっていう。周りのね、自殺した人間とか、受けた人間ってのははっきりは言えないですけど、あったときっていうのがあるけん、あったときに困るやねって。自分の中ですよ、自分の中で考えてたのは青年活動になしよってって言わ



れたときに、いや、たぶん一人じゃなんもできんけっていうののお守りじゃないけど、それがあるけって。自分で勉強して自分でものを全部言えるんだったら、おれもう活動せんでいいじゃないかと思ってる、っていうのが自分の意見なんですよ。考え方と言えば…そのときに困ったって人がおったときになんもできんかったら意味はないよねって話やけん…っていうのをずっと話しおって、それ言ったらそうやねって。やっぱ…何もないよりもなんかあったほうがいい。どうせなら歳が近い人間がいいよって。だって今支部長に言ったところで、中学生、高校生が言ったところで、緊張ばっかしてもの喋れんで。もの喋れんけって、言わんねかなってなったら抱え込みますよね。抱え込んだらそれが悪い方向にしかならんで、考え込むんやったら相談できる人間がおったほうがいいじゃないって。(21・九州・30代・男性・正社員)

差別によって生じてきた生活の厳しさを支えたいという想いも、運動を継続する要因のひとつである。25は、地区の子どもたちの生活は厳しいが、落ちこぼれる思いをさせたくないことが運動を継続する要因だと語る。

やっぱり家庭の、その、両親の生い立ちもあると思うし、それで子どもたちが育った環境もとか、で、やっぱり高校に行こうと思ったとか行かないと思ったかとかいうのも良いです。行こうと思った理由ですね、何で行こうと思ったとか。でも何人かの子どもたちに聞くと、金儲けしたいけんってやっぱりお金稼がんといいけんね、生活が楽になりたいってということなの。良いと

こに入りゃ金が良かろうもんって返ってくると、ハアって。それが別に地区だけじゃないかもしれないんだけど、うん、率的に。子どもたちが思う。いつもお金お金って言う子たちっていうのはうちも含めて地区ですね。生活から抜け出したい…で、貧困家庭の中の子たちにすると、やっぱり片親がどっちかがムショに入ったとか、薬をしたとか、ハアって。【かなりシビアですね。】だから何で吸って、お母さんたちには何でそういう薬に走ったかっていう話を直で何人も聞きましたし。逃げたかったとか、楽になりたかったとか、で、まあ、その…結局、地区であり一の、そういうことやり一の、子どももそうなのって3つ揃ったら何も取り柄なくなるっちゃって。どれかをこう止めればいいのか…。でも地区なのは、地区を恥じることは何でもないけん、地区は地区で良いの、地区の人でも何万稼げるやんちゅう人もおるわっていう話をよくするんですよ。地区の人は落ちこぼれるっていう思いをさせたくないんですよ、子どもに、どっかで食い止めんといかんかなって。(25・九州・40代・女性・嘱託職員)

## 2 地元の仲間への愛着

語りの中でしばしば見られるのは、地元の仲間への愛着である。部落解放運動はそれぞれの部落で支部活動を行ってきたため、必然的に子ども会活動で形成された仲間たちは、先輩後輩を含めて幼なじみということになる。また、地域によっては親戚関係も多い。こうした関係が、地元のための活動に参加・継続する要因になっている。

【(青年部に) 関わろうと思ったのはなん

でなんですか?】行けてないときも、隙あらば来たいなあという思いはあったんで。  
【なぜでしょう?】人が寄ったらおもしろいからです。【幼馴染みたいなもんですね。】みんな大体そうですからね。(中略)できれば住み続けたいし、この場にもできるだけ寄ってっていう。でイベントとかあったらおもしろいし、参加していきたくと。  
(⑩・近畿・20代・男性・アルバイト)

なかには、差別撤廃の運動というよりも、仲間を大切にしたいという想いが強い⑩のようなケースも見られる。これら仲間関係、そして先輩たちにお世話になったことを返したいという互酬性が、運動継続の動機となっている。

青年部はやめるつもりはないです。逆に青年部を活気づけたいというのがあるんで。  
【どうなんですか?必ずしもそこの地元に住んでる人が運動やっていこうという感じではないでしょ?みんなやってます?】いや、もうここ2年3年は運動離れていうのが多くて、もう減ってますね。支部動員数が。【それはなんなんでしょうね?】やっぱり高齢者であったりとか、地元から出ていく、後は女の人やったら、地元から出てって、嫁ぎに…【結婚…】まあまあ結婚とか。まあそんな感じですね。まあうち高齢者が結構多い方なんで。だいたい今の青年、若い20歳から30後半までおるんですけど、その下っていうのが、確かにおるにはおるんですけど、あんまり運動に参加してない高校生とかばかりなんで。あんまりこう強要はできないんですが、親のこともあるんで。【親は反対してるんですか?】親は…その活動してない人間もおったりするんで。なかなかこう勧誘するっていうのが難

しいですね。(中略)【どこの部落に行っても同じ話を聞きますけど。なかなか集まれなくなってるっていうのはねー。】集まれないですね。やっぱり興味を示さんですね。やっぱりこう運動ってプライベートの時間を削って活動するじゃないですか。今若い子っていうのは絶対無理やろなと思う。なかなかついてくるっていうのは。よっぽどこの気持ちじゃなかったら。【そう、⑩さんが何て言うのかな、削ってまでやろうっていうのはなんなんでしょうね?】それは青年ですね。仲間意識が強いですね。それはずっと持ってるんで。やっぱり仲間大事にしたいんで。【それはその、差別の関係もありますか?】いや、そういうんではないんですけど、やっぱりこう徐々に運動していったって、絆っていうか、それが自然に出来たんですよ。で、自分のためじゃなくて、他の青年のために頑張ろうっていうのがあります。はい。【それでご自身の経験の中で、青年部に参加していろんな良い関係っていうんですかね?地元の。そういうのを体験されたということですか?】関係はそうですね。良く…良いかな。ケンカとかもないんで。こうやっぱり先輩が多いんで、一応青年部は。色々相談出来たりってうのがあるんで。やっぱり裏切ることも出来んの。まあそっから繋がったのかな、絆っていうのが。【そういうのが大切だと実感された?】そうですね、実感しましたね。この人を裏切ることは出来んって。入ったらそれが全体なんで青年部はちゃんとまとめようって。一つにしようって意思があるんで。(中略)苦痛はないですね。青年部は楽しいです。身内っていうのが、やっぱりでかいですね。あの一毎週寄って酒飲んだりとか多いんです。で、顔合わせっていうのが

よそより多いと思う。(⑩・四国・20代・男性・アルバイト)

部落解放子ども会活動や、青年部に連なる一連の活動は、居場所を提供する活動でもあるということだろう。宮地(2005)は、マイノリティがトラウマを克服し、自己への肯定的認知を引き出すための要因として、自らの存在証明をしあわなくてもよいコミュニティと、その中での仲間(ピア)や少し前を進む先輩(ロールモデル)との出会いが必要だと主張する(宮地, 前掲, 86-87頁)が、これらの活動はまさにそうした場を提供するものとなっていると言えよう。

ただし、先に見た⑩の語りにもあるように、実際には各地で青年部活動が活発に行われているとは言いがたい状況もある。その背景に、仲間関係やその背景にある親族関係が逆に抑圧的に働くことが、青年を運動から遠ざけているという語りもある。

上の人はやっぱ直系の親戚とかばっかりやきん、なんで(運動に)出てこれへんのやっという話になったりするけん、俺からしたら遠い身内とかになってくるきん。おれから言うた方がまだ向こうも言いやすいし…みんなきついけん、昔の人。【きつい?】お父さん世代はきついでしょ? ガーンって言うけん。余計嫌がるんで。【直系だったら遠慮もないしね。】そうそう、ちょっと気遣うとかないじゃないですか。遠まわしに聞くとかないけん。俺も見るきん、その場を。「お前来い!」って言うて立ち去るきん。返事する間がない、お前来い言うて終わるきん。あれはかわいそうなもんやっ。て。(⑤・四国・男性・20代・正社員)

### 3 地域を越えたつながり

前項で見たのは地元の地域での仲間関係であったが、部落解放運動は、地元の地域を越えた部落同士のつながりをも形成してきた。たとえば、先に紹介した全国青年集會はその典型的なものであり、それ以外にも県レベル・市町村レベル・周辺の部落レベルと、階層別にさまざまな人的交流が持たれてきた。これらが地域を越えたピア・グループとなっているのである。

【青年部の活動とか…やめたいとかいう人がいるわけでしょ?】まあそうです。【やめたいとか言うて来ない人がいるけども⑤さんは一応やってるわけですよ、それってなんでかなと思って。】僕は興味があったからこういうことに。苦にならんというか、俺は楽しいなと思うようになって最近。いろんな●●県の宣伝、話したりするんも好きやし、そこでいろんな話もできるし。(中略)僕はやっぱ…全高<sup>8)</sup>とかあるじゃないですか。全高のときに楽しいな一って。いろんなとこの人と付き合いすんの楽しいな一って。すごく強かったんですよ、いろんな人と交流するんが、楽しかってむちゃくちゃ。【その印象が強かったってことですか?】そうそうそうそう。(中略)【最初行ったらびっくりするっていう話はよく聞くんだけど。というかいっぱい人がいるから。どんな印象でした?】印象は別に…【特になかった? (笑)】友だちいっぱいやし、ぐらいかな。【●●県の集まりがあって、みんなで行くわけですよ?】●●県で集まってバス一台借りてとか。【●●県にも同じような地域がたくさんあって、そっから人が集まってきてっていう風な話をして?】そうそう、パンとかやっぱ高校生に

話するじゃないですか、いろいろ。めっちゃおもろいな思って。【なんか印象的なことってありますか？そのおもしろさの。】やっぱ年が近いけん、話も合うし。堅苦しい話がない、もう日常の話しかないけん。恋愛の話になったら若干…結婚差別ではないけど、お付き合いしちやいかんとか言われたりっていう話は出てくる。それをみんなでどう思う？みたいな。場的にはむちゃくちゃええと思う。俺は。ずっとあってほしいかなって思う。(⑤・四国・男性・20代・正社員)

#### 4 多様な学びと出会い

さらに、解放運動に関わることによって、そこに参加しなければ得られなかった学びと出会いがあることが、運動を継続している要因として語られている。

【東京にいて、地元に戻ってきたんですが、そのときの地元ってというのは、自分が生まれたムラ（部落）っていうことだったのか、そうじゃなくって、●●県のどっかっていうことだったのか、どっちだった？】自分の生まれたムラです。【あ、ほんとに。】はい。【他の人たちは、部落やから出たいって言う人たちが、一方にいるんじゃないんですか？そこはどう？】うーん、ぼくはでも出たくないですね。【どうして？】どうしてやろ？自分の今まで運動してきて、もし自分が部落でなかったら、この部落問題に関わるなかで、部落のことだけでなく、あの、障がい者であったり、ハンセン病であったり、ほかの社会的な地位を低くされている人のことを知ることができたっていうふうに思って。だから、自分にも子どもとかできて同じようにしてほしいし、

部落問題とかと関わって、社会的な眼を広げてほしいというか、そういう気持ちがあるんで。だから、ムラに残りたいです。(④・四国・30代・男性・正社員)

【運動が大切だとか、これやっていく意義があるとかいうのは、なんかそういうきっかけっていうのは？】やっぱ出会いやと思いますよ。むっちゃいろんな人に。やっぱ運動があって、そういう出会いがあると思うので、出会いはめっちゃ大きいですわ。【なんか影響受けたとかあるんですか？この人にとか。】なんかそれなりの人と会わせてもらわないですか、支部で。Yさんが書記長やって、いろんなとこ連れていってもらって、いろんなお偉いさんとか、色々会わせてもらったりとか、いろんな人とかも、いっぱいいるんですけど、そのとき飲んだのとかでも、障害者の雇用の、そんなんとかでも、あんな時とかにTさんがよく講演してたのを聞きにいつてみたりとか、すごいこと考えてる人いるんだなって感覚やったんですけど。今でも会ったりとか、事務所言ったりとかして話とかしたりしますし、そういう色んな出会いの積み重ねがありますね。(⑦・近畿・20代・男性・正社員)

#### 5 その他

その他として、親が部落解放運動に参加していたことに影響を受けて運動に興味があったという語りや、子ども会活動などを経過してきたので、運動をすることが当たり前であるという語りも見られるが、紙幅の都合上割愛する。

## おわりに

以上見てきたように、部落解放運動に参加している青年の多くは、部落解放子ども会活動を通じて、あるいは親から、さらには差別を受けることなどによって部落出身であると自覚し、差別をなくしたいという想いや、地元の仲間意識、あるいは地元を越えた仲間意識を基盤とし、そこから得られる新たな学びや出会いの経験を経て、運動を継続していることを明らかにした。差別を受ける可能性があるマイノリティの立場として、当事者同士の繋がりを強め、反差別運動への動員を図り、運動を高揚させることは必然の要求であり、同和対策特別措置法などを裏付けとする同和行政は、これら部落解放運動の取り組みを制度的に支えてきたと言えよう。

他方で、本調査対象となった世代では、こうした制度的な支援がなくなりつつあるなかで、子ども期を経てきた青年も少なくない。

中学生はね、子ども会はないんですよ。【ないんですか？】基本的に低学年までだったんですよ。【じゃあ、運動的なものから離れてしまうんですか？】そうですね。僕らの小学校の時というのは、まだ、法律があったので、解放子ども会的なものだったんですけど、そこからは普通の学童保育的な事業になって、あとは市の委託を受けて共同でやるという形だったので、もう全然がらっとそれは変わってましたね。【そうや、

法期限切れ世代ですもんね？】そうですね。【③①・近畿・20代・男性・正社員】

子ども会活動や青年部活動がなくなりつつある中で、複数の地域でそれらを復活させる取り組みも見られるが、部落の子どもたちが部落差別と向き合うための構えを作ってきたエンパワメントの場が失われつつあることは、部落出身者にとってディスパワメントであるだけではなく、差別の撤廃に向けても後退であることは疑いない。部落の子どもたち、若者たちを含め、マイノリティの子どもたち・若者たちの反差別運動やピア・サポートのための居場所づくりなどを積極的に支援することは、差別のない社会づくりを目指す上で、欠かせない営みだからである。

こうした経過のもとで、子ども会活動や青年部活動はかつてよりも停滞していることは否めない。また、少子高齢化社会と呼ばれて久しい現在において、特に地方では、子どもたちや青年たちが地元では少ない、あるいはいないという語りも複数見られた。このような現状を踏まえると、改めて地域を越えたネットワークの重要性を指摘することができよう。地元の地域の活動の活性化・居場所づくりとともに、地域同士をつなぐネットワーク、あるいは地域外に出た個人同士をつなぐネットワークがより必要とされている。インターネットの普及など情報化社会を迎えた現在、そうしたコミュニティを作することは、不可能ではないはずである。

### 注

(1)部落解放・人権研究所は、「部落の青年の雇用・生活調査研究会」（代表：福原宏幸・大阪市立大学大学院教授）を立ち上げ、調査票の作成と分析にあたった。

質問紙調査の分析結果については、部落解放・人権研究所（2011）、内田（2012）を参照されたい。  
(2)ただし、支部レベルにおいては青年が少なく、組織されていない場合もある。



- (3) 部落解放同盟中央本部ホームページ「2013年全国諸集會日程一覧」(<http://www.bll.gr.jp/guide-nitei.html>, 2013年5月6日閲覧)。
- (4) 1922年に結成された全国水平社以来、部落解放運動は当事者運動としての側面を強く持っている。部落解放同盟の前綱領(1997年5月27日部落解放同盟第43回全国大会決定)においても、「わが同盟の組織は『人間を尊敬する事によって自ら解放せんとする』部落大衆の結集体であり、差別と闘うすべての人びととの連帯をめざす大衆団体である」と規定されており、当事者団体としての運動であることを明示している。しかし、2011年3月4日に決定された新綱領(第68回全国大会決定)では、「部落解放同盟は、目的実現のために結集する部落民を核とする大衆運動団体であり、水平社宣言に謳い上げられた「人間を尊敬する事によって自ら解放せんとする者の集団運動」である」と、部落民以外の人々も参加している団体であると変更されている。
- (5) たとえば、西田(1992)、八木(1994)、倉石(1996)、松下(2001, 2002)、桜井(2005)、服部(2010)など。
- (6) たとえば、内田(2005, 2006, 2007, 2011)など。
- (7) 部落解放全国女性集會のこと。1956年から始まった部落解放同盟中央本部主催による全国の部落女性の交流集會であり、年に1回開催されている。かつては「部落解放全国婦人集會」という名称だったが、部落解放同盟第50回全国大会(1993)で婦人部を女性部に名称変更したことを受け、第38回集會から現行の名称に変更されている(湯浅 2001)。
- (8) 部落解放全国高校生集會のこと。もともとは部落解放奨学金制度が整備されたことを受け、高校生の組織化を図るために開かれた。1969年以降毎年開催されており、1975年には部落解放全国奨学生集會、1980年の第12回集會から部落解放全国高校奨学生集會、1998年の第30回集會から部落解放全国高校生集會に改称して現在に至る(前川 2001)。

#### 引用・参考文献

- Bertaux, Daniel, 1997, *Les Récits De Vie: Perspective Ethnosociologique*, NATHAN, Paris (=小林多寿子訳(2003)『ライフストーリー—エスノ社会学的パースペクティブ』ミネルヴァ書房)。
- 部落解放・人権研究所(2011)『部落青年に関する2つの全国調査結果報告(概要)』。
- 服部あさこ(2010)『マイノリティ女性のアイデンティ

- ティ戦略—「母親性」の役割』専修大学出版局。
- 倉石一郎(1996)「三世代におけるアイデンティティと生き方」部落解放研究所編『地域の教育改革と学力保障』解放出版社、145-164頁。
- 前川実(2001)「部落解放全国高校生集會」部落解放・人権研究所編『部落問題・人権辞典』部落解放・人権研究所、918-919頁。
- 松下一世(2001)「青年のアイデンティティ形成—心理的な側面から」『部落の21家族』解放出版社、453-504頁。
- 松下一世(2002)『18人の若者たちが語る部落のアイデンティティ』解放出版社。
- 宮地尚子(2005)「マイノリティのトラウマ」『トラウマの医療人類学』みすず書房、77-87頁。
- 西田芳正(1992)「アイデンティティ・ポリティクスの中のアイデンティティ—被差別部落出身者の生活史調査を手がかりに」『ソシオロジ』第37巻第2号、3-19頁。
- 内田龍史(2005)「被差別部落出身青年のアイデンティティ評価—2003年『部落解放第47回全国青年集會』参加者アンケートから」『市大社会学』第6号、65-78頁。
- 内田龍史(2006)「部落出身青年のアイデンティティと社会関係—奈良県連青年部調査結果から」『奈良人権・部落解放研究所紀要』第24号、81-100頁。
- 内田龍史(2007)「被差別部落マイノリティのアイデンティティと社会関係に関する研究」大阪市立大学大学院文学研究科人間行動学専攻社会学専修博士論文。
- 内田龍史(2010)「期待される『部落民』像—アイデンティティの獲得と継承」、黒川みどり編著『近代日本の他者と向き合う』部落解放・人権研究所、281-308頁。
- 内田龍史(2011)「部落の若者の部落問題意識と部落出身者としてのアイデンティティ—部落青年の部落問題認識調査から」『部落解放研究』192号、72-88頁。
- 内田龍史(2012)「全国部落青年の雇用・生活実態調査結果(2)—量的データの特徴」『部落解放研究』196号、7-28頁。
- 桜井厚(2005)『境界文化のライフストーリー』せりか書房。
- 総論部会②(1975)「解放教育の原則とは—融和主義と対決するために」部落解放研究所編『部落解放』79号。
- 吉村智博(2001)「部落解放全国青年集會」部落解放・人権研究所編『部落問題・人権辞典』部落解放・人権研究所、921-922頁。
- 湯浅孝子(2001)「部落解放全国女性集會」部落解放・人権研究所編『部落問題・人権辞典』部落解放・人権研究所、919-921頁。